

# ワクチンについて

現在使用されているワクチンには、『狂犬病ワクチン』と『混合ワクチン』の2種類があります。

## 1. 狂犬病ワクチン

狂犬病予防法という法律で、生後91日以降のすべてのワンちゃんに、毎年の狂犬病ワクチンの接種とお住まいの市町村への『犬の登録』が義務付けられています。ワクチン接種は年度ごとに行うため、2回目以降は毎年3～6月の期間に接種を行います。

日本では50年以上狂犬病の発症報告はありませんが、近隣国や東南アジアでは毎年狂犬病による死者が出ています。狂犬病は人を含むすべての温血動物に感染し、感染すると神経障害を起し、必ず死亡するという恐ろしい病気です。

## 2. 混合ワクチン

混合ワクチンは何種類かの伝染病ワクチンを混ぜたもので、2種混合、5種混合、6種混合、7種混合、8種混合、9種混合、11種混合など様々な種類があります。

当院では2種混合、5種混合、6種混合、および9種混合ワクチンを使用しています。

各ワクチンで予防できる感染症は以下になります。(5種混合ワクチンの対象は★印の感染症です)



### 犬ジステンパー

高い熱、目や二、鼻水、クシャミが出て、元気・食欲がなくなります。また、嘔吐や下痢をしたり、ふるえやケイレンなどの神経症状を起こす場合もあります。特に子犬では、死亡率も高い伝染病です。



### 犬伝染性肝炎

高い熱が出て嘔吐や下痢をしたり、元気・食欲がなくなり、時には目が白く濁ったりします。症状の程度は色々ですが、全く症状を示すことなく突然死亡する場合もある恐ろしい伝染病です。



### 犬アデノウイルス2型感染症

熱が出たり、食欲不振がみられ、クシャミ、鼻水の他、短く乾いた咳が続く、のどや扁桃がはれる場合もあります。特に、他のウイルスや細菌との混合、あるいは二次感染によって症状が重くなります。



### 犬パラインフルエンザ

水性の鼻水や咳、軽い発熱と扁桃のはれなどがみられます。犬アデノウイルス2型など他のウイルスや細菌との混合、あるいは二次感染が起こりやすく、その場合は症状も重くなります。



### 犬パルボウイルス感染症

食欲がなくなり、衰弱して発熱や嘔吐、時には血液の混じった激しい下痢がみられます。重症になると脱水が進み、短い経過で死亡することもあります。伝染力が強く、非常に死亡率が高い病気です。



### 犬コロナウイルス感染症

おもに嘔吐、下痢、脱水を起こします。幼若な子犬の場合、犬パルボウイルスなど他のウイルスや細菌などの二次感染を誘発し、症状が重くなる場合があります。



### 犬レプトスピラ感染症 コペンハーゲニー※

急性の腎炎と肝炎をおこし、高い熱が出た後、体温が低下し、急死する事があります。また、嘔吐やはぐき等の出血・黄疸もみられる重症型です。人ではワイル病の原因菌として恐れられています。



### 犬レプトスピラ感染症 カニコーラ※

腎炎と肝炎症状を呈することが多く、発熱、元気・食欲がなくなります。また、嘔吐や血便をし、腎臓がはれて死亡する事もあります。汚染した下水・沼・田の水を飲んだり、犬の尿からも感染します。



### 犬レプトスピラ感染症 ヘブドマディス※

人のレプトスピラ症<秋疫B>の原因菌により起こる病気、犬での感染が多く確認されています。腎炎と肝炎を併発することもあり死亡率も高い病気です。



※レプトスピラ感染症はこの3種類以外の血清タイプも確認されています。

### 3.接種時期と回数

当院では、生後8週、12週、16週と、生後4ヶ月までの間に3回の接種をしています。その後は、年1回の追加接種をお勧めしています。

\*1 生後8週齢以前に初回接種を行っている場合は、その接種時期により、子犬の間に3～4回の接種を行うこともあります。

\*2 生後16週齢以上経ってから始めてワクチンを接種するときには、初回接種と、3週間～1ヵ月後の2回目接種を行い、その後は毎年1回の追加接種をお勧めしています。

### 4.ワクチンの副作用について

ワクチン接種後には、少々熱が出たり、少し元気が落ちたり、注射部位に違和感を示したり、ということが1～2日間みられることがあります。これは体の免疫システムが正常に反応しているだけなので、あまり心配要りません。時間の経過と共にほとんどの場合、症状も消失します。

ごくまれに顔面が異常に腫れたり、吐いたりなどの症状が出るときがあります。その場合は、適切な処置が必要になりますので、速やかにご連絡下さい。

### 5.ワクチン後の注意点

- ・激しい運動、シャンプーは避け、2～3日間は安静にしてください。



ワクチン接種で  
安心お散歩デビュー！！